

〈日本語教育学とは何か5〉

日本語学習者の読解における推測

野田尚史

1. 日本語学習者の日本語の研究

日本語を母語としない日本語学習者に対する日本語教育を研究する「日本語教育学」では、(1)から(3)のようなことを明らかにする研究が行われている。

- (1) 日本語学習者にはどのような教材を使い、どのような教育を行うのがよいか
- (2) 日本語学習者は日本語をどのように使い、日本語をどのように理解しているか
- (3) 日本語学習者の母語から見ると、日本語はどのような言語か

(1)は、「日本語教育学」の中ではもっとも中心的だと考えられている研究である。広い意味では「日本語教授法」の研究だと言ってもよい。「カリキュラム作成」「教材作成」「教室活動」「日本語学習者の日本語能力の評価」「言語政策」などの研究が含まれる。

(2)は、日本語学習者がどのように日本語を話したり書いたりしているのか、また、聞いたり読んだりした日本語をどのように理解しているのかを明らかにする研究である。広い意味では「言語習得論」の研究だと言ってもよい。

(3)は、「日本語教育学」の中ではもっとも周縁的だと考えられている研究である。これは「日本語学」で行っている研究と似ているが、「対照言語学」の観点も取り入れながら日本語を母語としない日本語学習者の視点から日本語を研究するものである。

歴史的に見ると、(3)の研究が先行したが、しだいに(3)の研究より(1)の研究が中心になり、(2)の研究も台頭してきたという大きな流れがある。

今回は、このうちの(2)、その中でもまだあまり研究が進んでいないものとして、日本語学習者が日本語を読むとき、どのような推測を行っているかという研究を取り上げる。

2. 日本語学習者の読解についての研究

日本語学習者が読んだ日本語をどのように理解しているのかを調査するのは難しい。日本語学習者がどのように日本語を書いているのかを調査するのであれば、学習者が書いた日本語を収集すればよい。しかし、学習者が日本語を読んだときの理解のしかたを調査するには、たとえば(4)のような手間がかかる方法を使うしかない。

- (4) 日本語学習者にその人が読みたい文章を普段どおりに辞書などを使って読んでもらいながら、その文章から読みとった内容や推測したこと、わからない

ことなどをその人の母語で話してもらおう。話してもらっただけではよくわからないことについてはその人の母語で質問を行い、答えてもらう。

これは「思考発話法」(think-aloud method)を改良して、学習者の母語で調査を行い、学習者に対して質問をするようにしたものである。

詳しい調査方法や、その方法で収集されたデータは、(5)のサイトで公開されている。

(5) 野田尚史(他)「日本語非母語話者の読解コーパス」国立国語研究所, 2017-
[<https://www2.ninjal.ac.jp/jsl-rikai/dokkai/index.html>]

次の3から6.では、このような方法で収集されたデータを使いながら、日本語学習者が日本語の読解でどのような推測を行っているかを、「文字からの推測」「語からの推測」「文法からの推測」「文脈からの推測」に分けて見ていく。その後、7.で「推測の失敗」を取り上げ、最後の8.で「今後の展望」について述べる。

3. 文字からの推測

「文字からの推測」というのは、わからない語句の意味を、自分が知っている個々の文字の意味から推測することである。

たとえば、フランス語を母語とする初級レベルの日本語学習者は(6)を読んで、わからない「自習」の意味を「自分で学習する」ことだと適切に推測した。

(6) 利用者の立場に立った機能的なレイアウト。自習、ゼミなど目的別閲覧室も充実。(関西大学図書館ウェブサイト、現在はこの文は閲覧不可)

この学習者は、「自習」の意味がわからないので辞書で調べようとしたが、読み方を間違えて「じんしゅう」と入力したため、「自習」の意味が見つからなかった。そこで、「自」と「習」それぞれの漢字の意味を考えて、「自習」の意味を「自分で学習する」ことだろうと推測した。

「自習」のような漢語は、個々の漢字の意味から漢語全体の意味を推測しやすいものが多い。そのため、日本語学習者は漢語を構成する個々の漢字の意味を知っていれば、その漢語の意味を適切に推測できることがある。

4. 語からの推測

「語からの推測」というのは、わからない語句の意味を、文の中でその語と強く結びついている自分が知っている語の意味から推測することである。

たとえば、韓国語を母語とする中級レベルの日本語学習者は(7)の節タイトルを読んで、わからない「足下」の意味を「現在」だと適切に推測した。

(7) (2) 足下及び今後の貿易収支動向

(『平成29年版 通商白書』p.204, 経済産業省, 2017 [https://www.meti.go.jp/report/tsuhaku2017/pdf/2017_00-all.pdf])

この学習者は、この文脈では「足下」の意味が「足の下」ではないと思い、辞書で調べ

たが、わからなかった。そこで、「足下」の後にある「今後」との対比で、「足下」の意味を「現在」ではないかと推測した。

ある語の意味がわからなくても、その語の近くにあり、その語と強く結びついている語との関係で、わからない語の意味を推測できることがある。そのため、日本語学習者はわからない語と強く結びついている語の意味を知っていて、わからない語とその語との文法的な関係がわかっていれば、わからない語の意味を適切に推測できることがある。

5. 文法からの推測

「文法からの推測」というのは、語句や文の意味を文法的な形から推測することである。

たとえば、フランス語を母語とする初級レベルの日本語学習者は(8)を読んで、「テニスを選んだ」のは「親」ではなく、この文章を書いている人だと適切に推測した。

- (8) そこで、親に「ぼくにとってはテニスが自分^{じぶん}を表現^{ひょうげん}できるスポーツだから、水泳^{すいえい}でなくテニスをやらせてほしい。」と言ってテニス^いを選んだ^{えら}んだ。
 (「松岡修造さんからおうえんメッセージ」『みどりのなかま』391, 学研エデュケーショナル, 2017)

この学習者は、一般的によくあることとして、「テニスを選んだ」のは親だと思った。しかし、「親」に「に」が付いていることに気づき、「テニスを選んだ」のは「親」ではなく、この文章を書いている人(松岡修造)だろうと推測した。

語句と語句の関係や、文全体が肯定的なことを述べているのか否定的なことを述べているのかといった文全体の大まかな意味は、助詞や助動詞、動詞・形容詞の活用形などから推測できることがある。そのため、日本語学習者はわからない部分があっても、助詞や助動詞、動詞・形容詞の活用形が表す意味を知っていれば、語句と語句の関係や文全体の大まかな意味を適切に推測できることがある。

6. 文脈からの推測

「文脈からの推測」というのは、語句や文の意味を前後の文脈から推測することである。

たとえば、ドイツ語を母語とする初級レベルの日本語学習者は(9)を読んで、知らない語がたくさんあるこの文が述べている意味を「そこで長く働く人たちからサポートを受けることができるので、心配する必要はない」ということだと適切に推測した。

- (9) 語学力に自信が無くても先輩スタッフがサポート^{さぽーと}してくれる^{くれる}ので心配ありません。
 (「SHOYAアルバイトスタッフ募集!」というポスター、2016)

この学習者は、「先輩」と「サポート」と「くれる」の意味はわかったが、それ以外はよくわからなかった。しかし、これがアルバイト募集の広告だということから、「そこで長く働く人たちからサポートを受けることができるので、心配する必要はない」ということを述べているのだろうと推測した。

よくわからない部分があっても、前後の文脈や、その文章の性格から、わからない部分を推測できることがある。そのため、日本語学習者は前後の文脈やその文章の性格がわかっていれば、わからない部分を推測したり、「この部分はわからないままにしておいても問題がない」と推測したりできることがある。

7. 推測の失敗

ここまでの3.から6.で挙げた例は、どれも学習者の推測が成功したものであった。しかし、実際には推測が失敗することもある。

たとえば、スペイン語を母語とする中級レベルの日本語学習者は(10)を読んで、わからない「見渡す」の意味を「見て渡る」ことだと不適切に推測した。

(10) 日本列島全体を見渡すと、山と森合わせて国土の75%前後にもなるとい
ますが、^{に隠れつつもぜんたい} ^{みわた} ^{やま もりあ} ^{こくど} ^{ぜんご}
[後略]

「なぜ富士山は祈りの山になったのか」『にぼにか』13, p.9, 外務省, 2014
[https://web-japan.org/niponica/pdf/niponica13/no13_ja.pdf]

この「見渡す」は「すべて見る」という意味だが、この学習者は「見てから、何かの手段で日本を渡る」という意味だろうと推測した。

この推測が失敗したのは、「見渡す」の「渡す」の意味が「一方の側から反対の側に移動させる」という元の意味から「(一方の側から反対の側まで)すべてについて」という比喩的な意味に変化しているためである。このように部分と部分の意味を合わせても全体の意味にならないような語句の意味は、適切に推測するのが難しい。

8. 今後の展望

ここまで見てきたような日本語学習者の推測についての研究は、まだまだ行われていない。最近、野田(編)(2020)や野田・任(2021)のような詳しい研究が行われるようになってきたばかりである。

今後は、さまざまな母語のさまざまな日本語レベルの学習者の推測についての調査を行い、推測がどのようなときに成功し、どのようなときに失敗するのかを含めて、詳しい調査を行っていく必要がある。

日本語学習者の推測についての研究が進めば、日本語学習者に読解の教育を行うときに、わからない語句の意味をどのように推測したらよいかを指導できるようになる。

参考文献

野田尚史・任ジェヒ(2021)「韓国語を母語とする日本語学習者の読解における推測ストラテジー」『日本語学研究』70, pp.39-57, 韓国日本語学会。[韓国日本語学会ウェブサイトからダウンロード可能]

野田尚史(編)(2020)『日本語学習者の読解過程』ココ出版。

(のだ ひさし、本学教授)